第十七章

真夏の無礼講2012

ビデオアートと
ロックは
もともと相性が
いいんだぜ！

小杉 放庵「天のうずめの命」

SVP2 http://svp2.com/

真夏の無礼講 2012

3.11

記憶されるべきことは何か

作品と作家の説明

「3.11 プログラム」は素朴な動機で編まれた。われわれと同じようなインディペンデントな映像作家たちは、その時何を考えていたのだろうか？ 彼らにとって「それ以前と以後」では何かが変わったのだろうか？ という問いを彼らに発してみたかった。したがってこれらの作品は、何かの統一された意志や政治的主張に向かうものではない。それぞれの場で体験された「その時」が、それぞれの「その後」を伴って編まれた映像の集積である。

a few minutes later

その瞬間、私は自分の家に居た。
それから数分後。事態の急変が人々を動揺させた。
カメラは私がいるはずだった場所にあり、私が見るはずだった状況を記録した。その時を記録した映像と、その後に耳を離れなかった音、そしてあまりにも膨大なデータの集積が私の中でひと繋がりになる。
それらはとても不快で不安な連鎖だった。
心地良い風景がふとした瞬間に、また一変するような錯覚を覚えた。

協力：東京工業大学サイエンス&アートラボ Creative Flow

佐藤博昭（さとう　ひろあき）
教員ビデオ作家。ビデオアートの自主上映組織 SVP2 代表として、これまでに 16 回の自主上映イベントを行う。2009 年には「日本・マレーシアビデオ交流展」を主催・運営しマレーシアのビデオ作家 5 名を招いた。また、各地で高校生の映像制作ワークショップなどを開催している。

五十 (iso)

たくさんを意味する イソは五十。大地が揺れ、都市機能が麻痺し、安全神話が崩れ、経済ゴジラが出現した。この怪獣に立ち向かわねばならないが、いったいどの様にすればいいのだろうか？

服部かつゆき（はっとり　かつゆき）
1973 生。《動く画をつくる・おしえる》を軸に活動をしている映像作家。これまでクアラルンプール実験映画祭、プントイラヤフェスティバル 0.2、ビデオプールなどの国内外の映画祭やメディアセンターで作品を発表してきた。近年は《動く画と学びのコーディネーター》としてワークショップのファシリテートに専念し。子供と大人が共に楽しめる、体験・交流型の映像制作と学習の場を展開している。SVP2 団員。

the lake

現実から目を背け、幻想を信じたいのは人の性なのだろうか。
1922 年に宮沢賢治が書いた「春と修羅」の補遺のように、暗く冷たい湖に落ちている私たちは、そのことを受け入れて初めてそこから飛び立つことができる。
3.11 以降、崩れかけている幻想の向こうの現実を見つめること、そして“飛騰”できるようにと願う。

中沢あき（なかざわ　あき）
日本大学芸術学部映画学科映像コース在学中に SVP に参加。以降キュレーター及び映像作家として、インディペンデントシーンから教育機関や公共施設、映画祭やアートフェスティバルなど、様々な場と形で映像メディアに関わる。2006 年制作のビデオ作品「願いをひく Drawing wishes」は、ベルリン国際映画祭、WRO'07、他世界各国の映画祭にて上映・受賞。ケルン在住。

Jan Verbeek（ヤン・ファベーク）
1966 年ドイツ、ボン出身。89 ～ 96 年デュッセルドルフ芸術アカデミーでナン・フーバーとナムジュン・パイクに学び、その後ケルンメディア芸術アカデミーで学ぶ。ビデオ作品やオーディオヴィジュアル・インスタレーションを世界各国で展示、また個展や受賞も多数。2004 年制作の「on a Wednesday Night in Tokyo」は、Tampere 国際短編映画祭ベストドキュメンタリー賞その他受賞、MoMA 所蔵作品。

SKY DON’T FALL

空を見張っている。
空が落ちてこないように。
ハトがいつでも飛んでいるように。
だって子どもも飛ぶんだ。

ずっと空を見ていた。
空が落ちてこないように見張っていた。
そしてわたしは、月が銀行の看板の向こうへと沈んでいくのを見た。

中村明子（なかむら　あきこ）
栃木県出身、東京都在住。1997 年サンフランシスコ・アート・インスティテュート（米カリフォルニア州）卒業後、映像制作をはじめる。00 年代は翻訳及び通訳業に従事する一方でアートスペースの運営や上映会の企画、様々なアーティストとの共同制作など多岐に渡り活動、近年はじっくり制作しながら国内外で作品発表を続けている。現在は初の長編映画（自主）を準備中。

swimming up from Fukushima gulf to home river

福島第一原発から 25km ほどのところにある福島県南相馬市に流れる新田川（niida river）には今年も鮭が遡上しています。
鮭は、卵を産み自分たちの未来を紡ぐために荒波や逆流を超えて故郷の川に帰る習性を持っています。その力強い姿は、放射能と対峙しながらも復興に力を注ぐ南相馬の人々やあるいは、原発後処理や経済不安など様々な逆境と立ち向かわなければいけないこれからの日本人の姿を象徴しているようでもあります。
Fuck the radiation!!!

足利　広（あしかが　ひろし）
千葉大学、the School of Art Institute Chicago で映像制作を勉強した後、国内外での個展、グループ展、芸術祭参加を主な活動としている。2011 年 Franck Muller Art Grand prix 審査員賞受賞。2011 年 Tokyo Wonder Site 第六回企画公募入選。

Making of Tokyo

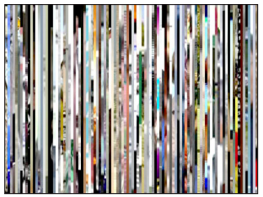
3 分 11 秒でわかる東京の作り方

佐野洋介（さの　ようすけ）
1985 年、東京都出身。映像クリエイター、ICLABO 代表。2008 年に映像、音楽、舞台、アートなど様々な表現者と「共に何かを何かで伝えたい」という思いでアーティスト集団「ICLABO」を立ち上げ代表を勤める。映画・ドキュメンタリー・PV・ビデオアートなど幅広く作品を作り続けている。

Voice of farmland

ある大地には、稲や桃、林檎が実り、鯉が泳いでいました。先祖たちの墓があり、死者を守る人たちが暮らしていました。
僕たちはそうした歴史から知恵を得、豊かさをわけられ、次の世代へ引き継ぐ準備をしてきたはずでした。
ところが今年 3 月、不意にその役目を果たせないことが決められてしまいました。

東　英児（あずま　えいじ）
福島県郡山市出身。 映像を使った地域活動を積極的に行う。 新宿区大久保地区で出会った在日フィリピン人少年らとの出会いをおったドキュメンタリー映 画『KAIBIGAN』（2011 年 /18 分 /HD）が、「ルーツ 2 フィルム」映画祭（2012 年 2 月 / 神戸）にて上映された。2012 年、沖縄へ移住。



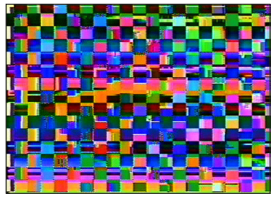
… …….,

3 月 11 日にそれは発生しました。
それの前では、私は無力であります。
日々のニュースの中で、それはフィクション化しました。
しかし、私の体の中には沢山の悪性物質がおそらく存在しています。
私はそれを目だけでなく、身体全てで受容していました。
私はその映像を身体全てで受容していました。
私は真実の映像を目にすることは出来なくなりました。

石井陽之（いしい　はるゆき）
1984 年に東京の東部に生まれる。 現在は日本大学芸術学部に助手として勤務。 映像・インスタレーション・音楽制作・DJ 活動等々をしています。学生時代は都市をテーマにした映像作品を制作。近年は日々変化するインターネット世界と現実世界で起きた事件を自身の日常生活にフィードバックした作品を制作しています。

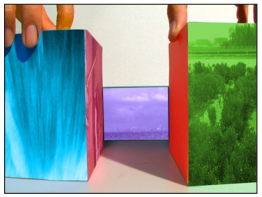
commemorative photos

一枚の写真には、無数の記憶が刻まれている。
しかし、それを見て懐かしむ全ての人を失った時、写真は何のためにあるのかと考える。
なぜ撮るのか。なぜ残すのか。



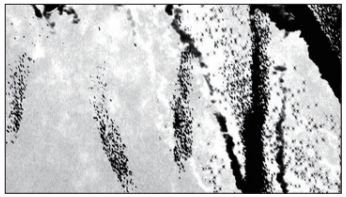
Video Feedback Aleatoric no.1

ヴィデオ・フィードバックによって自動生成されたイメージとサウンドを使い、リズムをともなって即興演奏的に抽象的なパターンが次々と移り変わっていくパフォーマンス。



Tangram

日々何気なく撮ったビデオ映像がパズルのピースになる。それらピースを、傾け、組み合わせ、自分が生きた時間、知覚した世界を形作ってゆく。



Hi-Kage

火は役に立つが害にもなる。
古代より畏敬の対象であった火を人間はエネルギーとして利用することで、文明を築き上げた。
火は命の象徴とされる一方で死や破壊の意味も含んでいる。
そして、火を見つめることで人の心は内省へと導かれ、また、慰められる。

Bye Bye Alfred

しかし、“鳥”さえもどこかへ行ってしまったのです。
鳥たちは理想郷を求め、人間にとって恐怖たりえるものなど気にすることなく生き抜いていくのです。
さよならアルフレッド、もう行かなくてはならないのです。

佐竹真紀（さたけ　まき）
1980 年北海道豊頃町生まれ。北海道教育大学大学院修了。写真を使ったアニメーションで “記録” と “記憶” の狭間にある世界を探究している。「NHK-BS デジスタ・アウォード 2006（東京）」映像部門グランプリ、「ASK? 映像祭コンペティション 2009（東京）」大賞、「12th Paris Festival of Different and Experimental Cinemas（フランス）」グランプリ、「25. Stuttgarter Filmwinter（ドイツ）」最高賞 Norman 2012 受賞など。

河合政之（かわい　まさゆき）
哲学的かつ先鋭的な映像作品を制作、世界 30 ヶ国以上で作品発表、受賞多数。文化庁や各種財団の派遣芸術家として、NY、パリ、イスラエルなどに滞在。展覧会のオーガナイザーや文筆家としても活躍する。現在、"Visual Philosophy" のコンセプトにもとづいて、新たなメディア文化を立ち上げるべく、さまざまなヴィデオアートのプロジェクトを展開。ジャンルを超えてその活動が注目されるアーティスト。

瀧 健太郎（たき　けんたろう）
1973 年大阪生まれ。武蔵野美術大学大学院映像コース修了。文化庁派遣 芸術家研修員 (’02)、ポーラ美術振興財団の研修員 (’03) として、ドイツでメディアアートを学ぶ。「アジアンアートビエンナーレ 2009」(台湾国立美術館),「Video Life」(2011, StPaulstGallery, NZ)、「黄 金 町 バザール 2011」にて屋外での映像投影、ビデオアート先駆者の証言を集めたドキュメンタリー「キカイデミルコト」(2011) など作品発表、啓蒙活動を行なう。
http://www.netlaputa.ne.jp/~takiken/

島田清夏（しまだ　さやか）
日本大学芸術学部映画学科映像コース卒。学生時代より花火打揚従事者として現在まで、株式会社丸玉屋にて花火を打ち揚げている。大学卒業より、アートディレクター毛利臣男に師事。現在、アーティスト中谷芙二子のアトリエ、プロセスアートにて勤務。主な作品歴として、オーバーハウゼン国際短編映画祭インターナショナル部門ノミネート（ドイツ）、サンテティエンヌビエンナーレ参加（フランス）等。

田中廣太郎（たなか　こうたろう）
1979 年東京生まれ。作品はイメージフォーラムフェスティバル、ロッテルダム国際映画祭、EMAF、International Cinema Film Festival of Aix-en-Provence など国内外問わず多数の映画祭で上映、受賞される。
http://kotarotanaka.net

From Malaysia

Morning

「3.11」のあと、彼女は「自然」について考えていたのだという。環境として与えられた、野山や海のようなものでだけではなく、生き物が生きていく以上は必要な、摂理のようなものを。残酷であるように思われる光景は、我々が日常から排除しようとしてきた「自然」な行為であるし、それはコントロール出来ない大きな力でもある。(佐藤博昭)

Kok Siew-wai（コク・シュウワイ）
ビデオアート、サウンド、ボイス・インプロビゼーション 作 家。米 国留学中にポーリン・オリヴェロ ス、トニー・コンラッド、ピイア・ボ ーデ な ど の 指導 で「 新 し い 」アートと出会う。イスカンダル・マレーシア・アート・ショウ 20 09 やチョッパ・エレクトリック・インプロバイズド・ミュージック フェス 2008(シンガポール)、ロッテルダム・フィルムフェスティ バル 2007 など数多くのフェスティバルに参加。チェラス・クアラルンプールにある地元作家集団シックケーエル(SiCKL) を共 同 設 立・運 営 す る 。

From Malaysia

Pattern

この詩的な作品は、シンプルで印象的な映像と淡々と語られる言葉が響きあい、見るものの気持ちを揺さぶる。作家が日常的に目にする風景は、石油精製工場が稼働する音や炎であり、過剰に実をつける庭の木の果実である。彼女が 2 つの風景から拾い上げた言葉は「休む」こと。この言葉が 3.11 後の日本へのメッセージなのだと思う。(佐藤博昭)

Sharon chin（シャロン・チン）
福文章と彫刻を使い特に場に固 有なインスタレーション作品を作 る。私 たちが 地 理、歴 史、人や 言語といかに交渉を持つかを彼 女の作品は観察する。マレーシ アを中心にシンガポール、タイ、オ ー ス ト ラ リ ア で 作 品 を 発 表 。伝達手法としての芸術への趣向 拡大とともに最近パフォーマンス やビデオに手をのばしはじめる。国際交流基金ジェネシス企画に 参加しレジデンシー・アーティストとして 今 年 7 月 ま で 札 幌 に 滞 在 。作 家 活 動 の 他 に 執 筆 も 行 い、マレーシアと東南アジアの 現 代 美 術 の ポ ー タ ル 、ア ー テ リ (www.arterimalaysia.com) を 共 同 設 立、運営、執筆をおこなっ ている。

武蔵大学社会学部学生作品

2012 年の 6 月から 5 日間の集中講座の中で制作された「3.11」をテーマとした作品集は、幾つもの発見をもたらしてくれた。惨事から 1 年が経過し、学生たちの中には、被災地を訪ねた者も、ボランティア活動を体験した者もいた。今、あらためて「3.11」を表現の契機として考えていきたい。体験したこと、考えていたことが、しばらくの期間をおいて人の中で反芻され、表現となっていく。今後も、このプロジェクトは増殖し、多くの「3.11」作品が編まれていくことを願っている。

武蔵大学社会学部学生作品

僕らの街

塚田寿恵／新 りこ／杠 駿平

武蔵大学社会学部学生作品

灯火

小塙悠平／加藤ゆきな／松木平 春乃

真夏の無礼講 2012
田中廣太郎セレクション
協　力：大　島　慶　太　郎

"S/T"

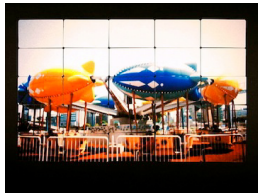
Wound Footage

ビデオ｜カラー｜サウンド｜6 分 2 秒｜2009

super8 のファウンドフッテージフィルムを用いた作品。スクラッチや切り刻むことによって生じたノイズとキャプチャ時に生じた別のノイズとが混在することによってアナログとデジタルの統一を図っている。

Thorsten Fleisch

1972 年、コブレンツ(ドイツ)生まれ。学生時代父親の Super8 のカメラで初めて実験映画を製作。後にフランクフルトでペーター・クーベルカから実験映画を学ぶ。作品は New York Film Festival、Ars Electronica、Transmediale、Ottawa International Animation Festival、Clermont-Ferrand Short Film Festival、International Film Festival Rotterdam、San Francisco Film Festival、Videoex などで上映される。ベルリン在住。



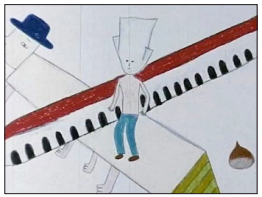
Backwash

ビデオ｜カラー｜サウンド｜4 分／2012

30000 枚のカードを使ったストップモーションアニメーション。25 分割された遊園地の乗り物の写真。初めに中心のカードから動き始め、それに続いて他のカードも渦をまく順番で一枚ずつ続いて動いてゆく。乗り物はらせんを描きながら上昇し一番高く上がった時を境に、画面の中の時間の流れが前後二方向に別れていく。

田端志津子

1972 年札幌生まれ、東京在住。1999 年より映像制作を始める。オーバーハウゼン国際短編映画祭など海外映画祭での上映多数。現在、写真を使ったストップモーションアニメーションを中心に制作中。主な作品『three minutes out』『むすんでひらいて』『停止円』など。



Pockets

オリジナル 16mm｜上映ビデオ｜カラー
サイレント｜3 分 31 秒（ループ）｜2005

A4 画用紙約 2000 枚にクレヨンで描かれた絵が、途切れることなく動き続ける、話のないアニメーション。どこかの出口はどこかの入り口。古いゲームのようにアニメイトされたフィルムがひとつひとつの物を変形させていく。壊れたものを治し、死んだ物を復活させる。永久に回る自己言及的なゲームである。(ルートヴィヒ・セイファース Ludwig Seyfarth)

斉藤幹男

現代美術・映像作家。1978 年北海道札幌市生まれ。早稲田大学芸術学校空間映像科卒業、その後、フランクフルトのシュテーデル芸術学院卒業、マイスターシューレ取得。アナログ、デジタル双方の魅力を引き出す映像作品、アニメーション作品の制作を行う。現在は、札幌市を拠点に国内外のアートイベントや芸術祭で作品を上映。また、市民を巻き込んだワークショップ形式の作品制作も積極的に行っている。個展に、『The Pencil of Nox』(Gallery Anita Beckers、フランクフルト、2007 年)、『Four Essentials of the Film』(Gallery The Old Ship、ロンドン、2008 年)。

Kaizer

ビデオ｜カラー｜サウンド｜10 分 19 秒｜2006

皇帝パノラマ館で見ることのできる写真には、周期的に回転するその特性ゆえに始まりと終わりという概念がない。一方映画は一度始まってしまったら、常に終焉を迎えるしかない。
また映画はそれ自身が視線を変えることの出来るメディアであるがゆえに空間は変容する。この作品においてデフォルメは歪みを意味するものではなく、ミハイル・ヤンポリスキーの言うように運動の痕跡として保存される。

田中廣太郎

1979 年、東京生まれ。映像作家、VJ、非常勤講師、など。SVP2 (Spread Videoart Project 2) メンバー。作品はイメージフォーラムフェスティバル、ロッテルダム国際映画祭、EMAF など国内外問わず多数の映画祭で上映、受賞される。

TOYOKORO

ビデオ｜カラー｜サウンド｜14 分｜2012

実家が故郷豊頃町から引っ越すことになりました。私は 10 年間、ここで作品を制作してきました。両親が残してくれた幼い頃の記録や、私が撮りためた日々の記録を元に、過去の作品や、家族の記憶をしまい込む。

佐竹真紀

1980 年豊頃町生まれ。2005 年北海道教育大学大学院修了。写真を使ったアニメーションを中心に制作。“記録” と “記憶”の狭間にある世界を探究している。
25. Stuttgarter Filmwinter / Norman 2012、12th Paris Festival of Different and Experimental Cinemas/ グランプリ、ASK? 映像祭コンペティション 2009/ 大賞など。

真夏の無礼講 2012
中沢あきセレクション

Legends,
Myths and so on....

伝説とか、神話とか

「昔々あるところに」というように、
不定の時空間で語り継がれる物語
は、しかし今もここそこに潜むのだ。

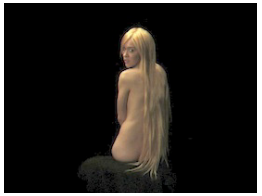
そんな物語性と共に綴られる
３作品を上映。

Spring: Ever: Again

東海林澄子
Emanuel Anthropelos

2012年｜8分22秒

「２０１１年３月１１日、遠く離れた土地で、膨大な水に流されて行く日本の家屋の映像を目にしてから１年、故郷日本への想いと葛藤の中、私たち 人間と自然との関係をもう一度問いかける。」



Lola/ What Loreley wanted to speak

中沢あき

2010年｜10分30秒

「„Ich weiß nicht, was soll es bedeuten（どういうことかわからないけれど)” ドイツの詩人、ハインリッヒ・ハイネのこの名高い詩と共に、ライン川の古伝説の女性、ローレライは美しい髪と魅惑の歌声を持つファムファタールとして知られる。その歌声で船乗りたちを死に招く物語は、ロマンティックかつ神秘的で美しい…。いや、ちょっと待った！彼女だって歌うだけじゃない、もっとなにか言い分があったはず。現代の女性、ローラの話はローレライの話と交差しつつ、ローレライの歌の謎のベールをはがしていく。そこに現れるのは、男性の視点によって形作られたこの有名な表象の押さえつけられた感情と、社会が望む典型的な女性性である。」

Die Wilderin vom Montafon

Evamaria Schaller

2011年｜22分

「オーストリアの山中。強靭かつ野性的、危うげかつ美しく、存在そのものが伝説のよう。山の隠者であるその女は、この雄大な自然の内にいる。いや彼女こそが自然そのものであり、生命を奪う力を持っている。オーストリアに実在したある女性の話が、新たな物語として解き放たれる。」

真夏の限界芸術

真夏の無礼講 2012
トークプログラム
ゲスト・福住 廉

『今日の限界芸術』(2008 年 BankART1929) の著者が、アートが今日を生き延びる活路を語る。美術館やギャラリーといった、いわゆる「ホワイトキューブ」で守られる現代美術に対して、約 50 年前に提唱された鶴見俊輔による「限界芸術」という概念を、現在性を伴ったムーブメントとして対置する。路上や様々な「場」で展開される、非アートな表現行為を、その逞しく自生するエネルギーに注目する

福住廉(ふくずみ れん)
1975 年東京生まれ。九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程単位取得退学。東京藝術大学大学院、女子美術大学非常勤講師。2005 年よりギャラリー・マキで連続企画「21 世紀の限界芸術論」を開催。共著に『フィールド・キャラバン計画へ』(水声社)、『ビエンナーレの現在ー美術をめぐるコミュニティの可能性』(青弓社)など。

以上で SIDE A : VIDEO ART SIDE は終了です
この後も引き続き、SIDE B Live & Rock Side を
お楽しみください

19:00- Verfix Live with Kensuke Fujii　田中廣太郎
20:00- 渡辺信之（Hey Ho Let’ s Go!）&森信哉
20:30- The Manish Boys

農業家・オブチカズオが栽培した有機野菜を販売しています
ライブリーな有機野菜もお楽しみください

第十七章
真夏の無礼講 2012

SVP2
http://svp2.com/